「異状死」遺体は語る

兵庫医大主任教授が「死体格差」出版

法医解剖医として約20年、遺体の死因究明にあたってきた兵庫医科大(西宮市)法医学講座の西尾元(はじめ)主任教授(55)が今年、「死体格差　解剖台の上の『声なき声』より」(双葉社、四六判200ページ)を出版した。貧困、老老介護、孤独死……。死の背景にある社会的な課題を浮かび上がらせる内容が注目されている。

(苅谷俊岐)

西尾主任教授は1997年に大阪医科大で法医解剖医となり、2009年から兵庫医科大に勤務。阪神間(6市1町)で病死とは判断できない「異状死」の遺体を解剖し、死因を調べてきた。同大の法医学教室で年間に手がける解剖は近年約300体に上り、10年前と比べると約2倍に増えている。

出版は今春。冒頭には、△遺体の一つひとつから、この国で生きる人々の、無言の苦しみや悲しみと相対してきた▽と記すように、解剖やその過程でかいま見えた故人の最期の出来事と背景をつづっている。

70代の男性は同大に運ばれてきた時、腐敗がかなり進み、死後約1週間は過ぎていた。解剖の結果、自宅で脳出血を起こしていたことがわかったが、なぜ長く病院に搬送されなかったのか――。同居の妻は認知症で、夫が亡くなったのに気づくことなく、訪問看護師が発見した際、遺体の横でテレビを見ていたという。

同じ「老老介護」で、80代男性は浴槽から出られなくなった認知症の妻を助けようとして、湯船内に転落。その上に妻が座るような格好になり、溺死した痛ましいケースもあった。

大雪が降る寒冷地でなくとも、街中の屋内で「貧困」による凍死もある。自宅アパートで亡くなっていた推定50代の男性は解剖により凍死だとわかった。数年前に職を失い、ガスや電気は止まり、独り暮らし。胃や腸の中は空っぽだった。人は十分栄養が取れなければ体温を保つことはできない。いくら衣類と布団にくるまっていても、凍死してしまうことがあるという。

＊

解剖事例の統計的な傾向についても考察している。

15年に解剖を手がけた320体のうち、独居者は約半数の46%。解剖件数がかつてより増えている背景には、独り暮らしで死亡時の状況がわからず「異状死」となるケースが増加していることがあるとみる。

また、16年の解剖事例で調べたところ生活保護受給者は約2割を占めていた。全国の生活保護率(2%弱)からみると、異状死の中で生活保護受給者の割合が、かなり高いと指摘する。

このほか、認知症を患っている人の事例は、09～15年に解剖した1442例中68例(4・7%)だったが、この期間中にも増加傾向がみられたとしている。このうち徘徊(はいかい)や行方不明中に事故で亡くなったと考えられる人は約3割に上った。

西尾主任教授は出版にあたって「改めて振り返ってみると、私が解剖してきた人たちの多くが社会的に弱い立場にいる事実、異状死と格差は常に近いところにあることに気づかされた」という。

「『異状な死』を迎えた人たちの最期の声を聞き、見送るのが私たち法医学の解剖医。この社会が少しでもよくなるにはどうすればいいのか、本書をきっかけに考えてもらえたなら」と話している。

「社会の問題に目を向けるきっかけになってほしい」と話す西尾主任教授(兵庫医科大で)

貧困、老老介護、孤独死… 社会の課題浮き彫り